

第二節 先史・古代史の探究

付―沖繩史の流れ（略年表）

沖永良部史、広くは奄美の先史・古代史に関しては資料少なくいまだ解明されない部分が多く、それだけに、われわれの祖先がいつごろにどこから来たか、いかなる生活をしていたか、興味ある問題である。しかし現段階ではなかなか結論には至らず、今後の研究に期待するより致しかたない状況と思う。

地図を開けば、南北に連なる日本列島は東方に太平洋を区切り、アジア大陸とは千島列島・樺太の二條の花綫^{（おんせん）}で吊り下げられた形となり、北西では朝鮮半島、対島・壹岐の花綫で日本海を囲み、弧状の南西諸島は遠く台湾に結び東支那海を抱く。黒潮暖海流はトカラ列島南部で二分し、本土両岸を洗って北上する。夏の季節風は南から冬は北よりの風に変わる。――この大陸との三方接点、暖流北上、夏冬の季節風こそが、古来日本人の大陸との往来交流の方法・経路を示し、特に海洋に生きる奄美沖

縄の人々には重要な風土条件であったに違いない。

南西諸島は日本本土と中国南部を結ぶ飛び石の道であり、単に薩摩―琉球の「道の島々」と言うよりも、大きな意味で南北交通の重要経路であっただけに、この地域の上古史解明は日本史に深く関連しその意義は真に大きいものがある。したがって内外学者が早くから注目し、学説を多く残してきた。大正時代には、歴史・民俗・言語学に新境地をひらき「沖縄学」の父と仰がれる伊波普猷氏は日琉同祖・日本文化南漸説を唱え、民俗学の先導者柳田国男氏は日本の基層文化を形成した稲作の北上説を述べている。

太平洋戦争後は、関係する言語学・民俗学・宗教関係・考古学・民族学など各分野からの研究が進み、古代社会が漸次その姿を現してきた。特に、従来の中国・朝鮮の資料を重視する方式から、島尾敏雄氏（元県立図書館奄美分館長）のいわゆる「ヤポネシア」方式とも言うべき日本本土をアジア大陸東海の島弧と見なし、日本海東シナ海を一衣帯水とする汎太平洋圏から広く考察する方式が採られるのが注目される。近來の資料は、フィリピン諸島・東南アジア各地・インドネシア、さらに太平

洋の諸島にまで及ぶ場合が多い。

中でも考古学の遺跡発掘は、特に昭和五十年代に入り急アンボで進み、県考古学会会長河口貞徳氏をはじめ、九学会連合奄美大島共同調査団、鹿児島大学考古学教室、琉球大・熊本大・沖縄国際大など、地元関係学究の調査活動めざましく、その学術報告は耳目を引きつけるものが続いている。また各市町村には博物館・資料館が設置されて専門の学芸員が配置され、学究層の拡大、一般人の関心度など従前の比ではなくなつた。

現在まで発表された論説を要約すれば、次のように成るのではあるまいか。

(一) 先住民が南方から北上したか、日本本土から南下したか、現在では結論には至っていない。南九州とは各方面近似の事例多く、言語関係では日本語と同祖語であることは明らかで、宗教儀礼もきわめて近い関係にあるという。

(二) 縄文時代には南西諸島相互間の交流もあり、土器に独自の文様・型も残されているが、南九州から南下する技法（市来式など）は奄美沖縄圏に波及している。原始的漁業・狩猟・採集で生活し、血族中心の小集団

を成していたのであろう。

(三) 弥生時代に入り土器は南九州の型式（山ノ口式など）が沖縄本島および付近島嶼まで分布が明らかにされたが、同時代に北九州・山陰・山陽の遺跡に、奄美以南の南海特産ゴホウラ製貝輪が発掘され、南北対応してその交流が認められる点興味深い。

土器種に炊蒸・貯蔵・祭祀の目的が示され、金属器具使用が始まり、前代の採集経済から計画的な生産経済へ進展する。相互扶助の形態も地域集団化し、支配・被支配の関係が生じ、遠く大陸や朝鮮半島の政治・社会・文化の影響を受け、かつこれを意識するようになる。

(四) 大和朝廷の記録たる日本書紀では七世紀に、続日本紀では八世紀前半に、多禰・掖玖（夜句・益救）・吐火羅（都貨羅）・爾加委・奄美・度感・信覚・球美・阿児奈波などと記された南島人との往来、交渉が記録され、最近では大和朝廷の出先機関たる大宰府から「奄美」と記された木簡が発見されたとの報があったが、その後遣唐使船の大陸への渡航路が南島経由から五島（長崎県）―揚子江下流域直航路に変更されるととも

に、南島経営が放置されたようで、記録も薄れる。

(五) 奄美沖縄群島の中では、沖縄島が最も耕地に恵まれ人口も比較的によく、当然に先進文化の導入摂取も早く、その地方支配者の権力は奄美各地に及んでいる。位置が近い沖永良部が早くからその支配下に入り生活万般に強い影響受けたのも当然である。江戸時代前はすべてその波紋渦中にあると言える。それゆえに沖縄史と日本史で主たる事項の年代を対比すれば、沖永良部史の変遷も推察されると思うのでそれを提示したい。事によつては沖縄と相前後するし、多くはさらに数世紀後れることと考えられる。

沖縄史の流れ（比嘉春潮・新里恵二・その他「沖縄より」）

沖縄 日本

1 他国の史書への登場 七～八世紀 一～二世紀初

「日本書紀」など「南島」から漂着、朝貢・使節派遣、

七五三年唐僧鑑真など漂着、六〇七年隋煬帝遣使

2 政治的支配者の発生 一～二世紀前～後一世紀

九世紀村落共同体に階級分化―十一世紀末按司発生―

対立

3 文字の伝来と使用 一三世紀 五世紀末

- 英祖王時代僧禪鑑佛教と儒教を伝うと云う
- 4 佛教の伝来 一三世紀 六世紀
一六五年頃浦添に極楽寺創設
- 5 鉄製農具の普及 一四世紀 六〜七世紀
中山王察度（即位二三五〇年）青年期、鉄塊を買い与えて
農具を造らせ人心を得——浦添按司に推さる。
即位後明に進貢貿易、南海および日本と交易
- 6 国土の統一 一五世紀初 四世紀末
三山対立——一四二六北山滅亡 一四二九南山討滅
- 7 中央集権国家の成立 一六世紀初 七世紀
尚真王時代百花繚乱身分制成立、各按司は首里に住居